泣きたくなる気持ちを無理矢理に抑え込んで、ローザは笑顔を作る。
「ごめんなさい、脅かすつもりじゃなかったの」
「いや、僕の方こそ悪かった」
大丈夫よ、と笑ってみせる。
「赤い翼が帰ってきたって知らせが来たわ」
「予定より早かったな」
「そうね」
途中に何度か来ていた報告でも、多少早く帰れそうだ、ということではあった。それでも、出発してそろそろ一月が経つ。
ローザにとっては、とても長い、一ヶ月だった。
「ただいま戻りました！」
一月振りに見る息子の姿に、思わずローザと顔を見合わせた。
「お帰り」
「お帰りなさい」
先ほどの気まずい空気がすこし緩和されたようで、セシルはほっとする。
「少し会わない間に、背が伸びたわね」
ローザの嬉しそうな声に、セシルも頷いた。
「そう…ですか？」
セオドア本人に自覚はないのだろう。やや疑わしげに、背後にいたカインに尋ねる。
「いや、俺は毎日お前と顔を合わせていたからな。そう変わらない気がするが」
「そんなことないわ、絶対に伸びてる。こんなに目線が近くはなかったもの」
ローザも女性にしては背の高いほうだ。まだ彼女のほうが勝ってはいるが、息子に追い越される日も、そう遠くないのかもしれない。
久しぶりに会う我が子に、次々と質問を浴びせるローザを後目に、セシルはカインに近付く。
「お帰り。ご苦労さま」
「ああ。……お前、疲れてないか？」
「そう、かな？　まぁ、忙しかったし……いや、でも疲れてるというほどでも」
無いと思うよ、と笑おうとしたが、あまりに真剣なカインの表情に、戸惑った。
「――よく、わからない」
無意識に、そう言っていた。
自分でも何を言っているのだろうと思い、俯くと、ぽんと頭を撫でられた。セオドアにならともかく、子供じゃな

は、自分の性格だと割り切ってしまった部分もあり、自覚的にやっているところもある。が、セシルはとにかく隠すのが上手い。周囲も、もしかしたら本人すら気付かない程に本当の自分を仕舞い込み、周りの人々が思っている通りの「セシル」を取り繕う。

上手くいっている間はそれでも良いのだ。人間、誰しも自分を演じている部分はある。一国の主ともなれば、なおのことだ。

だがそれが上手くいかなくなった時に、どうなってしまうのだろうか。

控えの間を含め、執務室の周辺から人払いをし、長い時間ずっと二人きりで過ごした。

特に会話があったわけでもない。ただ、時折フラッシュバックするのだろう、突然怯えたように震え出すセシルを抱き締めることしか出来なかった。

途中、ローザが一度様子を見に来たが、セシルは顔を合わせることを拒み、それをカインが彼女に伝えると、彼女はわかったわ、とだけ言うと寂しそうに笑った。予想はしていたのだろう。

夕刻になり、陽が落ちた頃、日中に比べれば幾分落ち着いた様子のセシルを自室まで送ってやった。部屋の中にローザの姿はなく、侍女から渡された手紙には、彼女の綺麗な字で、実家に顔を出してくるから明日戻る、との旨が記されていた。

セシルがほんの少し、安心したような表情を浮かべたのが、カインの目には妙に痛々しく映った。

窓の外には、バロンの街が見える。

街外れにある屋敷へ帰っても良かったのだが、昼間の事を考えると、城内に留まることにした。

いつもよりも明るい月の光に、満月なのかと気付く。

そして、ちょうど一月前、やはり満月だった日の夜のことを思い出した。

セシルは大丈夫?と言っていたリディア。

勘の良い召喚士の彼女は、この事態を予測していたのだろうか? カインのほうが、彼女にセシルは大丈夫なのかと聞いてみたかった。

コツコツと、扉を叩く音がした。

きっと、セシルだろう。そう思った。

窓の側にいたカインは、部屋を横切り、小さく扉を開けた。廊下には、予想通りの姿がある。

「来るなとは言わんが」

セシルを室内に招き入れたが、その格好に思わず小言

I'm gifted with a lot of heart.

5. 真　実

「リディア――」
「あ、カイン」
バロンの城門の前でばったりと出会ったのは、二月振りに会うカインだった。
バロンの王都の中で、ふと耳にした噂話。エブラーナに行っていたはずの王子一行が、予定をだいぶ切り上げて戻ってきた、何かあったのだろうか、と。そんなことを、兵士数人が話していた。
「あのね、私、セシルに会いに」
「ああ」
リディアの言葉にただ頷くカインを見て思う。この人は、もう、気付いているのだろうか。あの時に、彼には話しておくべきだったのだろうか。
どちらが正しかったのかは解らない。
けれど、予感は当たってしまった。
だから、リディアが知る全てを、話しに来たのだ。

「魔力？」
「そう。それが、原因」
カインに案内されたのは、バロン城の西の塔の最上階。昔、何度かだけ入ったことのあるこの部屋は、確かセシルの部屋だったはずだ。